

開催地名	奈良県 奈良市
開催日時	令和6年11月27日(水)14:00～15:30
開催場所	なら100年会館 中ホール
語り部	石川 弘子(福島県いわき市)
参加者	奈良市女性防災クラブ員 173名
開催経緯	コロナ禍で女性防災クラブの活動が制限されていた中で「16歳の語り部」という東日本大震災に関する手記を各クラブ員に回覧し、感想を取りまとめた文集を作成しました。この事業の継続性を考え、東日本大震災の現実をお聞きし、クラブ員の防災意識のさらなる向上を図るため、今回の講演会を開催しました。
内容	■はじめに 講演者の石川弘子氏は、東日本大震災を福島県いわき市で経験し、その後、地域防災活動や語り部としての活動を続けている。今回の講演は奈良市女性防災クラブが主催し、多くの地域住民や防災関係者が参加した。講演では、震災当日の出来事やその後の復興過程、そして今後の防災対策について語られた。特に、女性の視点からの防災活動や地域での支え合いの重要性が強調された。 ■あの日のこと 2011年3月11日、東日本大震災が発生。いわき市でも強い揺れがあり、その直後に大津波が襲来した。地震発生から約30分後、海岸部では大規模な津波被害が発生し、多くの家屋が流された。 石川氏は、津波の被害を目の当たりにしながら避難し、地域の混乱や家族・友人を失った人々の悲しみを経験した。自身も津波の恐ろしさを身をもって体験し、「なぜもっと早く避難しなかったのか」という後悔を抱えることとなった。 さらに、いわき市は福島第一原発事故の影響も受け、住民の避難指示や健康被害への懸念が生じた。放射能の問題は長期的な課題となり、津波被害に加え、避難生活の長期化や生活再建の難しさといった複合的な困難を地域住民が抱えることになった。 ■その後のこと 震災後、避難所生活が始まったが、物資不足や衛生環境の悪化、プライバシーの確保が難しい状況など、多くの課題があった。特に、女性や高齢者にとって避難所生活は大きな負担となり、防災対策にジェンダーの視点を取り入れる必要性が浮き彫りになった。 復興に向けた取り組みとして、いわき市では防災教育の強化が進められた。地域住民が主体となって防災訓練を実施し、災害時の役割分担を明確にすることで、今後の災害対応力を高めることを目指した。 また、復興住宅の建設やインフラの再整備が進められたが、震災後のコミュニティの変化による孤独感や精神的ストレスが新たな課題となった。特に、高齢者の孤立や住民同士のつながりの希薄化が問題となり、地域での支え合いの仕組みを強化する必要性が高まった。 ■まとめ 石川氏は、自身の経験をもとに、今後の防災対策として以下の点を強調した。 1.早期避難の重要性 ○「まだ大丈夫」という正常性バイアスを持たず、早めの避難行動をとることが命を守る鍵となる。 2.防災教育の徹底 ○過去の災害を教訓に、地域ごとの特性に応じた防災訓練を継続的に行うことが重要である。 3.避難所の環境整備 ○女性や高齢者、障がい者の視点を取り入れた避難所運営が必要。特に、トイレやプライバシー確保のための対策を強化することが求められる。 4.地域の支え合いの強化 ○地域コミュニティのつながりを維持し、災害時に助け合える仕組みを日頃から作っておくことが大切である。

	5.行政と住民の協力体制の構築 ○災害時には行政の支援が遅れることがあるため、住民同士の共助が不可欠。地域防災リーダーを育成し、実践的な対策を講じることが必要である。 最後に、石川氏は「災害は忘れた頃にやってくるのではなく、いつでも起こるもの。常に備えておくことが何より大切」と述べ、防災意識を高めることの重要性を強調した。  
開催地より	今回お話を聴講し、自身を守り、家族を守り、地域を守ることへの知識及び意識が向上したことで、今後起こり得る災害に対して、各クラブ員の活動のあり方や地域の防災力を上げる活動につなげていきたいと思います。